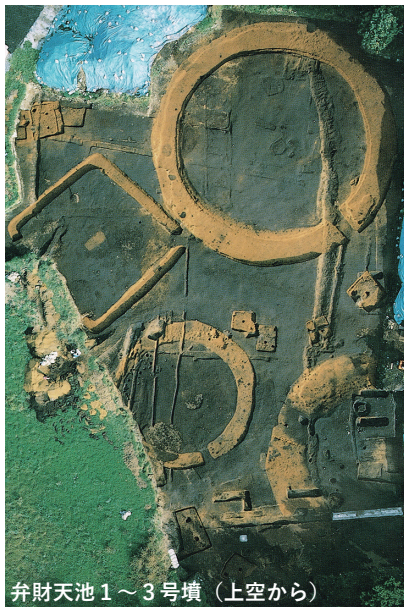


まだまだ見つかる 狛江の古墳

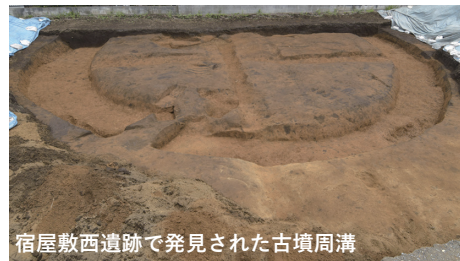
いったい狛江には、いくつくらい古墳が造られたのでしょうか。これまで3度その分布確認調査が実施されました。この調査結果を踏まえて、現時点で古墳である、古墳であろう、または古墳があったと確認できるのは69基になります。その内18基は、開発に伴う発掘調査にて確認されたもので、例えば、狛江駅北口の再開発では3基の円墳の周溝が、小田急線の高架化・複々線化事業では9基の円墳の周溝が確認されました。近年でも、宅地開発に伴う発掘調査で古墳の周溝が確認され、貴重な金属製品などが出土しています。これからも、開発に伴う発掘調査によって古墳の痕跡が確認される可能性は高く、狛江の歴史を塗り替えるような大発見が待っているかも知れません。



弁財天池遺跡上空から多摩川方面を望む



弁財天池1～3号墳（上空から）



宿屋敷西遺跡で発見された古墳周溝



寺前東遺跡で発見された古墳周溝

狛江駅北口の再開発に伴う発掘調査で、近接する3基の古墳跡（円墳）が確認されました。写真の円形の輪が古墳の周溝、四角は弥生時代の方形周溝墓になります。発掘されるまで、この場所に古墳があったことは知られていませんでした。

平成30・31年には、岩戸北一丁目の小田急線線路沿い（宿屋敷西遺跡）と東和泉一丁目の世田谷通り沿い（寺前東遺跡）で、これまで知られていなかった古墳跡（円墳）が確認されています。

狛江の古墳のポイント

古墳時代の狛江を考えると、立地が多摩川沿いだということ、縦断するように野川が流れていたということを忘れてはなりません。古墳の位置を地形図上に落としてみると、いくつもの古墳が多摩川や野川から見えて一段高いところ、川から見上げるようなところに象徴的に造られているのです。

実は、坂が少なく平坦に感じる狛江にも若干の起伏があり、多摩川や旧野川に向かって緩やかに傾斜しています。この傾斜のはじまる際、台地の縁辺にほとんどの古墳が造られているのです。

海に囲まれ、内陸に河川や湖の多い日本では、古くから舟などを巧みに操り、海や河川を水上の道として利用してきました。舟にて多摩川を航行していたであろう古代の人々。古代の人々の目に多摩川から望む古墳はどのように映っていたのでしょうか。



多摩川越しに望む狛江



狛江の地形と古墳

治水地形分類図「溝口」(平成28年2月作成、国土地理院)をもとに作成。市域を縦断する氾濫平野と浅い谷の谷筋はかつての野川の流路。また、弁財天池の南の谷筋は清水川の流路になる。